

## 「友から学んだこと」 中村 誠

(福岡県・糸島市立志摩中学校3年)

僕には、絶対叶えなければならぬ夢があります。僕には体に障害を持った友達がいまいます。体の右半分はマヒしていて、右手はブラブラしていますが、右足は少し動くので介助すると歩くことができます。えん下障害もあるので食べ物細かくぎざんだ物にとろみをつけて介助でゆっくり食べられます。水分は多く飲めないでお腹に開けた胃ろうからチューブを通して注入します。それから失語症もあり全く声が出ません。文字盤も使えないので自分の意志を伝えることはできないのです。とても不慣れた生活を送っています。

その友達と知り合ったのは僕が小学五年生の頃、四年前です。僕が野球の試合に出るようになり、対戦相手だった子と友達になった。その子は同級生と思えないくらいに野球が上手だった。ポジションも一緒だった。試合にも負けた。僕はとても悔しかった。「絶対に負けたくない」この気持ちを胸に僕は一生懸命練習した。小学生の最後の大会の決勝戦でそのライバルのいるチームと戦った。延長戦で僕のチームが優勝することが出来た。でも僕は勝つとは思えなかった。だから中学生になっても別のチームで戦っていくことを約束した。しかしその友達というチームとの試合があっても友達はいなかった。

友達は障害者になっていました。障害者になって三年になります。三年前のある日を境に突然障害者になってしまったのです。原因は病気です。本当に急な出来事でした。当時僕は大きなショックで友達を受け入れることができませんでした。

そんな友達を見て、初め「かわいそう」だと思っていました。でも一生懸命にリハビリに取り組んでいる友達の姿を見ていると、僕は「かわいそう」と思うのは良くない事だと思ふようになりました。なぜかという、人に対して「かわいそう」と思うことは、その人を見下しているように思ったからです。友達は障害を持ちながら一生懸命に

懸命に生きてるのに、上からの視線はうまんで大変失礼なことだと思いました。

このことは友達に対することだけではなく、全ての障害者に対して共通する気持ちです。障害者になりたくてなった人は誰もいません。そして誰もが障害者にならないという確率はゼロではないのです。友達のように突然、病気になるかもしれないし、事故にあつてけがをしたり、またどんな災害に出くわしてしまうかもしれません。もし僕がそうならしたら、想像するだけでもつらいことですが、そんなとき僕は人から同情されたくないと思います。「かわいそう」と思われたくないのです。人間はどのような障害を負っていても、命ある限りは生きていかなければならないことはみんなに平等に与えられていることです。ただ生きていくための条件が良いか、少し悪いかという差だけのことだと思いません。だから僕は障害者を見て「かわいそう」と思うことが許せなくなりました。

僕はお見舞いに行くと友達の車いすを押して出かけることがあります。よく他人の視線を感じるがあります。自分と違う人を見ると違和感を持つ人が多いのだと思います。でも自分と人は違っていて当たり前だし、その他人を認めることは最も大切なことだと思えます。世の中のすべての人が自分と違う他人を受け入れることこそ、差別のない社会の実現につながっていくように思っています。

友達のためにも、僕は野球を一生懸命頑張りプロ野球選手になり活躍します。(終)  
※夏の甲子園優勝の大阪桐蔭、中村誠主将が中学生の時に書いた作文です。

## 「余命幾ばくもない父親に

### 花嫁姿を見てもらいたい」

ウェディングプランナー2年目の当時、新婦の思いを叶えるため、初めて自分の意思で一步を踏み出した有賀明美さん。仕事に懸ける思いの原点となり、いまも有賀さんの背中を押してくれる新郎新婦の言葉とは。感謝と感動の奇跡を生んだ実話です。

「一か月後に結婚式を挙げたいんです」  
そんなお電話をいただいたのは、いまから

10年前、私がウェディングプランナーになってまだ2年目のことでした。

新婦のお父様は末期がんで余命一か月。お母様がおられず、ご自分を男手一つで育ててくれたお父様にどうしても花嫁姿を見せてあげたいとのことでした。結婚式は通常半年から1年かけて準備をするのですが、私は事情を伺い、絶対に花嫁姿を見ていただきましょう、とお約束してすぐ準備にかかりました。

ところが翌日、新婦はその予約をキャンセルされたのです。お医者様から改めてお話があり、お父様はもうあと2週間くらいしかもたないと言われたそうなのです。「一か月後では間に合わないのだから諦めようと思えます……」受話器を置いた後、寂然としなない思いが胸を覆いました。本当にこれでいいのだろうか。

私はもともと情に薄いタイプの人間でした。それまで人と深く関わり、心の底から感動したり、嬉し涙を流したりした経験は皆無でした。当時社会的にほとんど認知されていなかったウェディングプランナーという仕事を選んだのは、この仕事を通じて「有賀さん、ありがとう」と名前を呼ばれて感謝されるような働き方をしたいという思いがあったからです。

考えた末、私はその新婦に病室での式を提案させていただきました。人の命が関わっており、駆け出しの私にはとても荷の重い仕事でした。けれども人としてぜひこのお仕事をお受けしたい。ここで何かをすれば、何かが変わるかもしれない。そう考えて社長に直訴し、新婦もその提案を大変喜んでくださったのです。

ところが非情にも、お父様は挙式を翌日に控えて天に召されました。どうして神様はあと1日待ってくれなかったのだろう。悔しい思いとともに、後悔の念が胸を突き上げてきました。余計なことをしてかえって皆様を傷つけてしまった。なんとお詫び申し上げるべきだろう……。  
ご連絡をためらっているところへ、新婦から思いのほか明るい声でお電話がかかってきました。葬儀は無事終わり、入籍も済ませたので真つ先に私に報告したかったと

おっしゃるのです。

「父親に花嫁姿は見せられませんでした。おかげで式のために集まった皆さんに見守られて父は逝くことができました。きつかけをいただいた有賀さんは、私たちの恩人です」

初めて自分の意思で一步踏み出した結果、思いがけずいただいた感謝の言葉。私は頬を濡らして受話器を握りしめました。

喪が明けた後に改めて式のお手伝いをさせていただくことになりました。式は天国のお父様にも見ていただけるようガーデンで行うことになりましたが、当日はあいにくの雨。

浮かない表情の新郎新婦の傍らで、私たちスタッフは準備を進めつつ、どうか晴れますようにと心の中で懸命に祈りました。するとどうでしょう、予定の15分前に雨はピタリと止み、式は無事執り行われたのです。

「奇跡が起きましたね。新郎新婦にそうお声かけした時、お二人からいただいたお言葉に思わず涙が溢れました。」

「いえ、私たちにとっての奇跡は、有賀さんに出会えたことです。」

仕事で悩む時、迷う時、あの感動がいまも私を支え、後押ししてくれました。

これから手を携えて人生を歩んでいかれる新郎新婦のために、「ありがとう」と喜んでいただける思い出に残るひとときを創ってまいりたいと思います。

『一步を踏み出して』(有賀明美)

『致知』2012年7月号より

## 『しない生活』 (幻冬舎新書)

### 煩惱を静める108のお稽古

メールの返信が遅いだけで「嫌われているのでは」と不安になる。友達が褒められただけで「自分が低く評価されたのでは」と不愉快になる。人はこのように目の前の現実の勝手に「妄想」をつつくわえ、自分で自分を苦しめるもの。この妄想こそが、仏道の説く「煩惱」です。煩惱に苛まれるとき役に立つのは、立ち止まって自分の内面を丁寧に見つめること。辛さから逃れよ

うとして何か「する」のではなく、ただ内省により心を静める「しない」生活をブツダの言葉をひもときながらお稽古しましょう。

・「いい人」を演じるのをやめ、嫌なことは素直に断る。  
・ものごとは「どちらが得か」で迷わず、さつさと決める。  
・謝るときはよけいな言い訳を付け加えない。

・誉められても喜ばない。  
・貶されても嘆かない。  
・ネットですぐ誰かとつながるのをやめ、孤独を味わう。  
・相手の方が間違っている証拠があっても追いつめない。

・他人とくらべない。  
・過去の自分とも比べない。  
(月読寺・正現寺 住職 小池龍之介)

## 『幸せに生きるために

### 自分自身に決してはいけない15のこと』

- ① 「間違った」人と時間を過ごさない
  - ② 困難から逃げない
  - ③ 自分に嘘をつかない
  - ④ 自分自身の願望を後回しにしない
  - ⑤ 自分ではない誰かになろうとしない
  - ⑥ 過去にしがみつかない
  - ⑦ 失敗を恐れない
  - ⑧ 失敗した自分を責めない
  - ⑨ 幸せを買おうとしない
  - ⑩ 幸せを求めて他人に依存しない
  - ⑪ 立ち止まらない
  - ⑫ まだ無理だ、と思わない
  - ⑬ 間違った付き合いはしない
  - ⑭ 以前の恋愛が悪かったからといって新しい恋愛を拒まない
  - ⑮ 他人と競わない
- ※最近大変に話題になっているマークとエンジエルという男女ふたりのライターが書いたブログ「人生を楽に生きるコツ・30」からの抜粋です。特に10番目の項目が大切だとのこと。ステキな写真入りで各項目ごとの解説もありますので、ネットで検索してみてください。